東海学園大学教育研究紀要　第６号：40-55，2021

〈原著論文〉

岐阜県大垣高等女学校における卒業生の進路
―「同級消息」欄の記述内容を中心に―

烏田直哉 *

はじめに

本稿では、高等女学校卒業生の卒業後の進路について、岐阜県を一事例として明らかにする。後に示す通り、『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』[1)]（以下、『諸調査』とする）から岐阜県における高等女学校卒業生の進路をみると、その大半をなす「更ニ学校ニ入リタルモノ」「其他ノ者」の、卒業者数に占める比率はおおよそ中位にあり、高等女学校卒業者進路の典型を示す一例たり得ると考える。

高等女学校は、「女子にとっての学歴は制度化された教育資格・職業資格として社会的な流通性をもつことが少ない」[2)]、あるいは「一応女子教育としては完結する機能」[3)] をもっていたとされ、上級学校への進学機能を強く持っていた中学校とは一線を画していた。『岐阜県教育史』などでも指摘されているように、高等女学校令で「女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為ス」とは規定されていても、その実際の存在意義は、「良妻賢母」を育てることにあった[4)]。しかし、大正末期になると、「近代的職業としてのオフィス・ガールの需要」[5)] の高まりとともに、女性労働者が増加した[6)]。時代の進展とともに、「良妻賢母」というステレオタイプは次第に変化し、戦時下になると、「それまで根強くあった家政重視の『嫁入り道具』」[7)] という性格は変化していった。一方で、大正期にあっても上級学校への進学はほとんどなかったとする証言もある。例えば、1920（大正９）年の大垣高等女学校卒業生は、「当時の女学校教育は、しとやかな良妻賢母となるように躾けられ、現在ほど女性の地位が認められていない時代のこととて上級学校へ進学する人は学年でも二三人ていど。ただ女子師範学校へは少々進まれました」[8)] と述べている。このような高等女学校の性格を説明するにあたり、社会システム理論からアプローチした研究がある。すなわち、女子中等教育システムは、その独自の機能である家族システムとの「構造的カップリング」を果たしてそれ自身を存続させ、また、そのためには男子中等教育システムへの浸透が欠かせなかった、との見解である[9)]。さらに、そのことが中等学校令による一元化の基盤になったとも述べている。

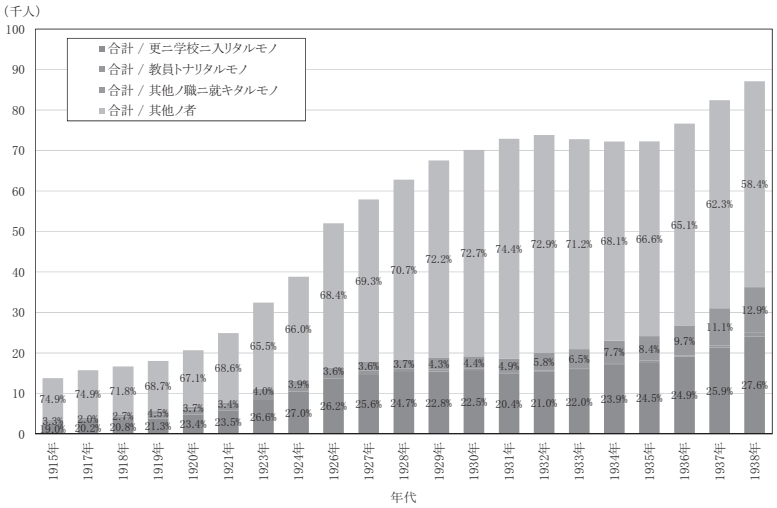
実態はどうだろうか。本稿では、中等学校令前の昭和戦前期を対象に、岐阜県大垣高等女学校同窓会編『同窓会誌』[10)]（以下、『同窓会誌』とする）中の「同級消息」欄を手がかりとして、卒業直後の進路の実態について考察する。卒業直後の進路をみるため、卒業年の翌年に発行された同誌「同級消息」等の記述内容を中心に検討し、卒業後の動向を把握する。なお、分析対象とする時期は、高等女学校進学者の進路に変化がみられた昭和戦前期とする。

１．全国的な傾向

『諸調査』から、全国的な進路動向を確認しておく。【図表１】は、各年度の『諸調査』に掲載されている「前学年度卒業者状況ニ関スル調」をもとに、進路別にみた卒業者数および構成比の推移をみたものである。卒業者数は、1920 年代におよそ２万人からおよそ７万人へと急増した。1930 年代前半でや

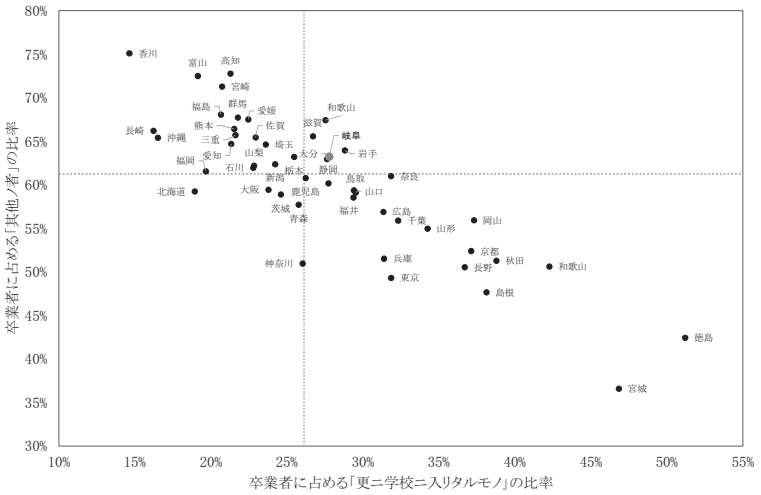
* 東海学園教育学部

や減少し、後半に至り再び増加した。1930 年代の減少について、『岐阜県教育史』においても、経済不況のあったこの時期に入学志願者が減少したと指摘している[11]。進路別にみると、「更ニ学校ニ入リタルモノ」と「其他ノ者」とにほぼ二分されていた。高等女学校卒業者は「家庭に戻って花嫁修業に努めたものは予想外に少な」[12]いとは言え、この期間の全国的な動向について言うと、「其他ノ者」が最も多くを占めていたことに変化はない。しかし、1915 年におよそ 75％であったものが、20 数年を経て 20％近く低下している。また、高等女学校の「進学機能の増大」[13]とともに「更ニ学校ニ入リタルモノ」の比率は上昇しており、最も低い 1915 年でおよそ 19％割、最も高い 1938 年でおよそ 28％と、10％近く伸びている。この期間の高等女学校の性格の変化を捉えることができる。また、「就職者の増加」[14]がみられたと言われる通り、「其他ノ職ニ就キタルモノ」、すなわち就職した者の比率の上昇は顕著であり、1937 年には 1 割を占めるようになった。



〔文部省普通学務局編『全国〈高等女学校実科高等女学校〉ニ関スル諸調査』、大正 5 年～昭和 15 年（国立国会図書館デジタルコレクション）より作成。〕

【図表 1】高等女学校卒業生の進路



〔文部省普通学務局編『昭和十三年度　全国〈高等女学校実科高等女学校〉ニ関スル諸調査　昭和十三年十月一日現在』、昭和 15 年、80-94 頁（国立国会図書館デジタルコレクション）より作成。〕

【図表 2】府県別の進路動向

【図表 2】により、特徴的な府県をみてみよう。「更ニ学校ニ入リタルモノ」の比率が最も高く、「其他ノ者」の比率が最も低かった 1938 年の『諸調査』中、「前学年度卒業者状況ニ関スル調」から作成した。宮城県においては、この年に 13 校の高等女学校が設置されており、卒業者数は合わせて 1,550 名であった[15]。「更ニ学校ニ入リタルモノ」が 726 名・約 46.8％と半数近くを占めていた。同県には、宮城県女子専門学校が設置（1926 年認可）されており、同校への進学が一定数占めていたものと考えられる[16]。なお、「本学年度入学状況ニ関スル調」をみると同県の補習科入学者は 101 名であった[17]。「教員トナリタルモノ」が最も少なく 23 名・約 1.5％、「其他ノ職ニ就キタルモノ」が 234 名・約 15.1％であった。「其他ノ者」は 567 名・約 36.6％であった。「更ニ学校ニ入リタルモノ」の比率が高く、相対的に「其他ノ者」の比率が低く、全国一であった。徳島県においては、この年に 9 校の高等女学校が設置されており、卒業者数は合わせて 832 名であった[18]。「更ニ学校ニ入リタルモノ」が 426 名・約 51.2％と全国一であり、宮城県と同様に半数を占めていた。補習科入学者はなく[19]、この時点で県内に女子の専門学校も設置されていない。1908 年に徳島高等女学校に併置

された徳島県女子師範学校、あるいは兵庫県など近隣県の高等教育機関への進学なども考えられる。「教員トナリタルモノ」も同じく最少で9名・約1.1%、「其他ノ職ニ就キタルモノ」が44名・約5.3%であった。「其他ノ者」は353名・約42.4%であった。これらの府県とは対照的な香川県においては、この年に12校の高等女学校が設置されており、卒業者数は合わせて1,118名であった[20)]。「更ニ学校ニ入リタルモノ」が180名・約16.1%と最も低かった。女子の専門学校は設置されておらず、補習科入学者は22名であった[21)]。「教員トナリタルモノ」はやはり最少で10名・約0.9%、「其他ノ職ニ就キタルモノ」が64名・約5.7%であった。「其他ノ者」は864名・約77.3%であった。このように、高等女学校卒業後の進路には、府県によって大きな違いがみられた。

2. 岐阜県における卒業生の進路

『諸調査』から、岐阜県における学校別の進路について検討する。

【図表3】は「更ニ学校ニ入リタルモノ」の推移である。地域による人口、母数が異なるので単純に比較できないが[22)]、通算すると岐阜高等女学校でおよそ4分の1を占めており、これに大垣高等女学校を加えると、半数近くを両高等女学校で占めていた。ついで、中津高等女学校が通算で500名と多数に上っている。後にも述べるが、「更ニ学校ニ入リタルモノ」には補習科への進学も含まれており、岐阜・大垣両高等女学校以外に、1930年以降中津高等女学校にも補習科が設けられたことがこの数字にあらわれているものと考えられる。

最も少なかったのは、【図表4】の「教員トナリタルモノ」であった。大正期に入って設立された新設校では、八幡高等女学校で累計34名と最も多い。明治期からあった在来の学校では、大垣高等女学校で21名となっている。後に述べるが、補習科在学中に教員検定にパスして小学校教員となった者もあり、【図表3】の「更ニ学校ニ入リタルモノ」に潜在的な教員志望者が多く含まれているものと考えられる。

【図表5】に示した「其他ノ職ニ就キタルモノ」は、「教員トナリタルモノ」についで少なく、1920年まではほぼ皆無であった。しかし、着実に増加しており、1930年代に入り100名を超えた。ただ、補習科在学中に就職したケースは含まれていないと考えられる（後述）。【図表6】は「其他ノ者」である。

【図表3】岐阜県における高等女学校卒業者の進路
「更ニ学校ニ入リタルモノ」

西暦	県立											私立		計
	大垣	岐阜	中津	加納	羽島	海津	本巣	武儀	多治見	八幡	高山	富田	佐々木	
1915年	18	25	3											46
1917年	4	24	2	0										30
1918年	2	15	11	0										28
1919年	7	7	4	0										18
1920年	13	12	6	5							0			36
1921年	16	10	10	11		0	0				10			57
1923年	19	36	16	14	0	0	0	0	0	0	15	0		100
1924年	21	63	25	18	1	0	20	14	0	2	19	0		183
1926年	27	58	28	33	12	9	15	9	6	7	10	2	0	216
1927年	73	74	19	23	7	8	21	13	5	7	19	8	0	277
1928年	46	89	22	32	7	12	20	17	7	12	19	16	13	312
1929年	54	85	9	29	11	6	14	10	8	11	24	17	5	283
1930年	42	67	48	20	3	9	14	7	7	2	10	20	14	263
1931年	41	60	42	18	5	12	20	7	8	2	11	13	7	246
1932年	40	56	40	22	7	4	12	8	9	19	27	26	2	272
1933年	60	43	33	15	1	5	21	5	9	3	12	29	4	240
1934年	43	60	38	14	0	3	24	2	38	2	14	21	7	266
1935年	11	59	31	19	1	6	19	1	18	5	9	20	2	201
1936年	59	56	43	16	3	9	16	9	31	5	10	10	0	267
1937年	24	57	28	24	1	4	12	8	31	7	6	15	3	220
1938年	64	53	42	0	18	2	13	96	38	1	10	33	4	374
通算	684	1,009	500	313	77	89	241	206	215	85	225	230	61	3,935

〔文部省普通学務局編『昭和十三年度　全国〈高等女学校実科高等女学校〉ニ関スル諸調査　昭和十三年十月一日現在』、昭和15年、80-94頁（国立国会図書館デジタルコレクション）より作成。以下、【図表4】～【図表6】も同様。〕

【図表4】岐阜県における高等女学校卒業者の進路
「教員トナリタルモノ」

西暦	県立											私立		計
	大垣	岐阜	中津	加納	羽島	海津	本巣	武儀	多治見	八幡	高山	富田	佐々木	
1915年	6	1	0											7
1917年	1	0	0	0										1
1918年	7	2	0	0										9
1919年	0	3	2	0										5
1920年	0	0	2	0							0			2
1921年	0	0	3	0		0	0				2			5
1923年	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		1
1924年	3	2	2	0	2	0	1	1	0	5	0	0		16
1926年	0	0	1	0	0	0	0	0	1	4	2	0	0	8
1927年	0	0	0	0	0	0	1	0	2	2	4	0	0	9
1928年	0	0	3	0	0	0	0	1	4	5	0	0	0	13
1929年	0	1	1	0	0	0	1	1	0	2	0	0	2	8
1930年	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	4
1931年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1932年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2
1933年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1934年	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2
1935年	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
1936年	2	0	0	0	0	0	0	0	2	3	1	0	0	8
1937年	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	3	2	10
1938年	0	0	0	0	0	0	1	5	2	7	0	2	0	17
通算	21	9	14	0	2	1	5	8	13	34	11	5	5	128

【図表５】岐阜県における高等女学校卒業者の進路
「其他ノ職ニ就キタルモノ」

西暦	県立											私立		計
	大垣	岐阜	中津	加納	羽島	海津	本巣	武儀	多治見	八幡	高山	富田	佐々木	
1915 年	0	0	0											0
1917 年	0	0	0	0										0
1918 年	0	0	0	0										0
1919 年	0	0	1	0										1
1920 年	0	0	0	0							0			0
1921 年	2	0	1	0		0	0				0			3
1923 年	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		2
1924 年	5	4	0	0	2	0	1	1	0	0	0	0		13
1926 年	5	4	4	1	0	0	1	0	2	1	1	1	0	20
1927 年	5	10	6	6	1	0	1	6	6	3	6	2	0	52
1928 年	8	4	2	5	0	0	4	0	5	0	1	3	0	32
1929 年	4	4	2	3	0	0	1	2	8	1	0	4	4	33
1930 年	12	17	2	4	1	0	0	5	1	2	6	4	8	62
1931 年	8	11	3	6	0	0	2	0	3	1	6	3	2	45
1932 年	8	22	5	4	0	0	2	3	5	1	3	6	2	61
1933 年	10	7	2	3	1	0	7	2	5	0	6	9	2	54
1934 年	12	8	6	10	0	1	0	8	5	4	5	6	9	74
1935 年	19	5	3	5	0	1	8	2	4	3	6	11	0	67
1936 年	30	8	9	12	0	0	2	10	9	3	8	5	6	102
1937 年	26	9	11	16	1	0	4	8	5	2	10	6	3	101
1938 年	27	10	14	0	0	4	15	0	14	2	10	4	4	104
通算	181	125	71	75	6	6	48	47	72	23	68	64	40	826

【図表６】岐阜県における高等女学校卒業者の進路
「其他ノ者」

西暦	県立											私立		計
	大垣	岐阜	中津	加納	羽島	海津	本巣	武儀	多治見	八幡	高山	富田	佐々木	
1915 年	39	57	31											127
1917 年	83	71	30	0										184
1918 年	79	70	27	0										176
1919 年	89	83	26	0										198
1920 年	70	76	35	43							0			224
1921 年	65	81	26	24		0	0				23			219
1923 年	74	60	33	30	0	0	0	0	0	0	13	0		210
1924 年	116	83	62	29	42	0	24	29	0	30	20	0		435
1926 年	162	88	59	51	30	38	71	48	38	32	24	52	0	693
1927 年	148	101	107	63	38	35	61	71	81	23	36	73	0	837
1928 年	212	104	108	50	42	35	67	72	95	26	33	71	28	943
1929 年	212	106	104	56	37	41	77	72	97	15	44	83	21	965
1930 年	235	106	69	74	41	42	77	82	114	22	42	92	35	1,031
1931 年	229	108	65	60	47	40	70	80	100	32	53	80	16	980
1932 年	140	109	88	69	43	38	77	64	101	17	20	71	27	864
1933 年	193	148	73	73	38	42	58	84	100	19	47	76	19	970
1934 年	191	142	57	67	38	34	57	62	70	21	56	43	15	853
1935 年	187	142	59	66	39	30	56	53	71	17	47	61	16	844
1936 年	157	141	49	69	41	36	67	49	80	25	44	82	21	861
1937 年	175	140	60	51	41	32	83	67	82	27	62	85	20	925
1938 年	159	146	96	0	37	41	72	0	105	30	62	71	32	851
通算	3,015	2,162	1,264	875	554	484	917	833	1,134	336	626	940	250	13,390

全国的な傾向と同じく、最も多くを占めている。1919 年で９割近くに達しており、1938 年においても６割を占めていた。

３．大垣高等女学校卒業者の進路

『同窓会誌』中の「同級消息」の記述内容から卒業直後の進路をみる。本稿では、1926 年から 1942 年の本科卒業生、およそ 2,400 名の進路を対象とする。【図表７】の通り、卒業後の進路を大きく６つに分類した。まず、補習科も含め進学したケースを「進学・その他の学修」に分類した。そして、会社等への就職者を「就職」に、裁縫などの稽古事に勤しんだケースを「裁縫等稽古・家事」に分類した。「母校たる中尋常の処女会の委員」[23] として活躍した例、「当村の女子青年団」で「団員を導きつゝ銃後の諸事業に御活躍」[24] した者、「新体制下の女子青年団に色々御活躍」[25] した者など、地域の活動に取り組んだケースは「その他」に分類した。また、「病魔におそはれて日々療養」[26]、「医専への入学準備」のために「一生けんめいに勉強」[27] など、病気療養中あるいは受験準備中も「その他」に分類した。在学中、あるいは卒業後に死去が判明した者は、「死去」とした。「御消息が分りませんが御無事で御暮しの事と存じます。御暇の折一度御便り下さいまし」[28] など、消息不明者は「不明」とした。

【図表７】大垣高等女学校卒業生の進路

卒業年	進学・その他の学修	就職	裁縫等稽古・家事	その他	死去	不明	計
1926 年	46 (31.9%)	11 (7.6%)	49 (34.0%)	2 (1.4%)	(0.0%)	36 (25.0%)	144 (100.0%)
1927 年	64 (35.6%)	16 (8.9%)	63 (35.0%)	(0.0%)	2 (1.1%)	35 (19.4%)	180 (100.0%)
1929 年	63 (33.3%)	11 (5.8%)	101 (53.4%)	1 (0.5%)	1 (0.5%)	12 (6.3%)	189 (100.0%)
1930 年	53 (27.3%)	7 (3.6%)	123 (63.4%)	(0.0%)	1 (0.5%)	10 (5.2%)	194 (100.0%)
1931 年	38 (20.0%)	9 (4.7%)	104 (54.7%)	1 (0.5%)	1 (0.5%)	37 (19.5%)	190 (100.0%)
1932 年	39 (20.1%)	9 (4.6%)	110 (56.7%)	1 (0.5%)	(0.0%)	35 (18.0%)	194 (100.0%)
1934 年	27 (14.9%)	11 (6.1%)	101 (55.8%)	(0.0%)	1 (0.6%)	41 (22.7%)	181 (100.0%)
1935 年	32 (16.8%)	10 (5.2%)	90 (47.1%)	(0.0%)	(0.0%)	59 (30.9%)	191 (100.0%)
1937 年	56 (22.1%)	29 (11.5%)	124 (49.0%)	(0.0%)	(0.0%)	44 (17.4%)	253 (100.0%)
1940 年	93 (38.8%)	40 (16.7%)	94 (39.2%)	(0.0%)	2 (0.8%)	11 (4.6%)	240 (100.0%)
1941 年	67 (26.9%)	50 (20.1%)	71 (28.5%)	(0.0%)	5 (2.0%)	56 (22.5%)	249 (100.0%)
1942 年	97 (42.9%)	59 (25.7%)	57 (25.2%)	1 (0.4%)	1 (0.4%)	12 (5.3%)	227 (100.0%)
通算	675 (27.8%)	262 (10.7%)	1,087 (44.7%)	6 (0.2%)	14 (0.6%)	388 (16.0%)	2,432 (100.0%)

〔岐阜県大垣高等女学校同窓会編『同窓会誌』第 23 ～ 36 号（欠号あり）、大垣高等女学校同窓会、昭和２～ 18 年を基に作成。以下、【図表８】～【図表 10】も同様。〕

以上の分類にそって、昭和戦前期において、卒業後の進路にどのような変化があったのかを検討する。以下、(1) 進学・その他の学修をした者、(2) 就職した者、(3) 裁縫等稽古・家事に従事した者を中心に、具体的な卒業後の様子について述べる。

（1）進学・その他の学修

【図表 8】は、「進学・その他の学修」に分類した 675 名をさらに、「専門学校・高師」「師範学校・その他教員養成諸学校」「高等女学校・実業学校等」「各種学校」「補習科等」「小学校補習科」「会社等の学校」「不明」に分類したものである[29]。篠山高等女学校の事例と同様、補習科へ進んだ者が多数であり[30]、通算して 343 名・およそ 50.8％を占めていた。ついで、専門学校への進学が 99 名・およそ 14.7％、師範学校や教員養成所などへ進んだ者が 92 名・およそ 13.6％であった。

【図表 8】進学・その他の学修

卒業年	専門学校・高師	師範学校・その他教員養成諸学校	高等女学校・実業学校等	各種学校	補習科等	小学校補習科	会社等の学校	不明	計
1926 年	10	7	3		23		2	1	46
1927 年	11		6	3	43	1			64
1929 年	6	13	2	2	31	4	2	3	63
1930 年	7	5	1	3	28	5	1	3	53
1931 年	1	6	3	1	24	1	1	1	38
1932 年	4	4	2	1	24	3	1		39
1934 年	3	3	1		13			7	27
1935 年	3	1		2	18	1	3	4	32
1937 年	8	5	3	1	28	2	3	6	56
1940 年	12	13	1	4	51		5	7	93
1941 年	13	21	2	1	14		5	11	67
1942 年	21	14	5	6	46		3	2	97
通算	99	92	29	24	343	17	26	45	675

①専門学校

専門学校に分類した者の進学先を示すと、【図表 9】の通りである。東京府が 56 名となっており、半数以上を占めていた。東京府への進学をみると、岐阜県出身の下田歌子が創設した実践女子専門学校への進学が 12 名と最多であった。「女流歌人の大家を伯母様に御持ちだけあつて此の道の御研究の為に実践女学校に」[31]、あるいは「実践女子専門学校にて国語の先生の卵」[32] などの目的をもって進学した。そのほか、共立女子専門学校、東京女子薬学専門学校、日本女子大学校と続く。東京府が大半を占めるが、大きく引き離して、近隣の名古屋市にある金城女子専門学校や椙山女子専門学校への進学者 16 名を確認できた。大垣からの通学も容易だったのだろうか、「金城へお通ひです。時々車中等でお見受け致します」[33]、「名古屋の椙山へ御通学」[34] などの記述がみられた。また、「大阪女子医学専門学校に御在学です女医になられた御姿が想像（ママ、「さ」カー筆者註）きれさうです」[35]、「京都同志社女子専門学校家政科にて学の道に御精進」[36]、「帝国女子薬学専門学校に御入学になり、その方面の御勉強に御精進」[37] など、大阪や京都など複数の高等教育機関が設置された、近隣府県へ進学した。

【図表 9】専門学校進学者の進学先

学校所在地	進路先	進学者数	学校所在地	進路先	進学者数
東京府	日本女子大学校	7	大阪府	梅花女子専門学校	1
	日本女子大学校カ 東京女子大学カ	2		帝国女子薬学専門学校	4
	東京女子医学専門学校	4		樟蔭女子専門学校	2
	東京女子専門学校	2		大阪女子高等医学専門学校	4
	実践女子専門学校	12		大阪府 計	11
	帝国女子医学薬学専門学校	1	京都府	同志社大学	1
	共立女子専門学校	11		京都府立女子専門学校	1
	千代田女子専門学校	2		同志社女子専門学校	4
	女子美術専門学校カ	1		京都女子高等専門学校	3
	東京女子薬学専門学校	9		京都府 計	9
	武蔵野音楽学校	1	兵庫県	神戸女学院専門学校	1
	東京女子高等師範学校	2		神戸女子薬学専門学校	3
	大妻女子専門学校	1		兵庫県 計	4
	「東京の女専」	1	不明	「医専」	1
	東京府 計	56		「薬専」	1
愛知県	金城女子専門学校	12		女子高等師範学校	1
	椙山女子専門学校	4		不明 計	3
	愛知県 計	16	合計		99

②師範学校・その他教員養成諸学校等

師範学校やその他教員養成所などへ進んだ者のうち、「岐阜の師範に御在学中」[38]、「岐阜県師範学校二部で御勉学中」[39]、「師範で御勉強なさつておいで」[40] など、明確に師範学校、あるいはその第二部へ入学したと判断できたケースは、通算して 92 名中 57 名であった。進学・その他の学修をした者 675 名の 8.4％であり、全体（2,432 名）の 2.3％と狭き門であった。あるいは、「全国の中でも私費化を早期に推進した」[41] ことが入学者の少なさに繋がったのかも知れない。

師範学校進学者以外で教員を目指した卒業生の記述からは、「第六臨時教員養成所」[42] へ進んだ者、あるいは、卒業後に教員「検定にパスなすつた」[43] ケースがみられた。また、「岐阜の教員養成所にて御熱心に御勉学」[44] のように、1939 年に開所した岐阜特設小学校教員養成所[45] への入学と思われる記載があった。さらに、1941 年より大垣高等女学校に附設された国民学校初等科訓導講習が県の依嘱により開講され、93 名が受講した[46]。この講習を受講したと思われる、「母校の臨時教員養成講習所で御勉強中」[47]、「母校に設立されました（ママ―筆者註）。国民学校教員養成講習所を三月出られまして（中略）大垣

市西、（中略）岐阜市三里、（中略）大藪国民学校に御奉職」[48]、「母校に於ける国民学校の臨時教員養成講習所にて昔の如く楽しく学生生活をお送りです」[49]、「大変仲良く国民学校初等科訓導養成講習所に御勉学中でございます」[50] などの記述がみられた。多くの同窓が受講しており、母校にて「学生生活」を「仲良く」過ごしていたようである。

また、補習科へ進んだ者も、後に検定を受けて教員となったケースがみられたが、次項に述べる。

③補習科への進学

岐阜県内の高等女学校補習科は、1924年時点で、岐阜・大垣高等女学校のみに設置されていた[51]。補習科は「上級学校への進学希望者を対象にした」[52] ものであるが、「女学校生活をさらに1年延長したい」[53] 生徒も進学したとされる。大垣高等女学校の場合、1938年度の『諸調査』中、「本学年度入学状況ニ関スル調」をみると、42名の補習科入学志願者があり全員が入学している（岐阜高等女学校の場合は55名の志願者があり、これも全員が入学した）。1938年度の「前学年度卒業者状況ニ関スル調」、つまり1937年度の卒業者がその後どうしたかをみると、64名が「更ニ学校ニ入リタルモノ」であった。20名ほどが補習科以外の進学をしたとみることができるが、ただ、「岐阜高女の補習科に在学中です」[54]、設置されたばかりの「富田高女の補習科に通つて居られます」[55] など、他校の補習科へ進むケースもあった。

【図表8】の通り、最多を占めた補習科進学者は343名であったが、補習科在学中、あるいは補習科を退学して職に就いた場合もみられた。教員になったケースの記述内容を示すと、「検定に美事パスせられましてこの一月から養老郡江東小学校に御教鞭」[56]、あるいは「二学期で補習科を退学され加茂郡の小学校の先生として御出勤の由」[57] など、年度途中で補習科を退き小学校教員として勤務したことが分かる。また、「暫く補習科にて御修養してゐられましたが、九月始め頃より名古屋鉄道局におつとめになりました」[58]、「補習科御修業後洋服姿も颯爽と共立銀行におつとめ」[59] など会社へ勤めたケースも確認できた。さらに、本稿で対象としたうち1例のみであるが、「補習科にお通ひでしたが十一月御結婚」[60] との記述があった。その他、若干ではあるが、「温知小学校の補習科へお裁縫のお稽古のためお通ひ」[61] など、裁縫稽古のために小学校の補習科へ行った者を確認できた。

④その他の中等学校、各種学校、会社等の学校

その他中等学校へ進んだ者としては、各種学校から後に高等女学校となった東京家政学院高等女学校が11名と最多であり[62]、人気を集めていたようである。ついで、私立愛知高等裁縫女学院を前身とする愛知高等女子工芸学校[63] への進学が8例確認できた。その他、中京高等女学校など、名古屋市の中等教育機関が3分の2を占めた。各種学校への進学先も、東京府、あるいは岐阜市や名古屋市にある、裁縫を学ぶ学校、進学準備のための学校がみられた[64]。若干数ではあるが注目できるのは、「大阪の叔母様のお家から古屋英学塾にお通ひ」[65]、「大垣私立ミツシヨンスクールで英語オルガンの御研究」[66]、「パルモア英学院に御勉学中と洩れうけたまはつて居りますが、英語の御上達のお目ざましき事でございませう」[67] など、当時としては最先端であった英語の学修をした者もみられた。

会社等の学校に分類したケースが26例ほどあった。このうち23例は、「名古屋の松坂屋裁縫部で御修業中です」[68]、「名古屋の常盤裁縫塾に行つて居られます」[69]、「名古屋市常磐裁縫塾へいらつしやいました」[70]、「名古屋松坂屋の裁縫部へ御通ひでした」[71] などの記述から、「花嫁学校として非常に評判がよい」[72] 名古屋松坂屋の常磐裁縫塾へ入ったものと判断できる。また、大津の「滋賀県赤十字看護婦養成所」で「よき看護婦として」[73] 修養中などのケースが3例みられた。これらは、百貨店店員あるいは「看護婦」を目指したのであって、就職に直結した進学であったとみられる。

（2）就職

先に示した【図表7】の通り、卒業直後に就職した者は通算して262名を確認できた。その内訳を【図

表10】に示した。以下、教員になった者、その他の公務等に就いた者、会社等に就職した者について、具体的な進路をみる。

【図表10】就職先

卒業年	教員	その他公務	会社等	不明	計
1926年	3	2	5	1	11
1927年	9	3	4		16
1929年		1	8	2	11
1930年			7		7
1931年	1		8		9
1932年	1	1	6	1	9
1934年	1	1	5	4	11
1935年		3	7		10
1937年	2	5	22		29
1940年	7	12	17	4	40
1941年	8	11	28	3	50
1942年	1	24	32	2	59
通算	33	63	149	17	262

①教員

まず、教員になった者について検討する。教員として勤めた者は通算して262名のうち33名・およそ12.6%であった。具体的な勤め先をみると、小学校（国民学校）と明確に分かる者は16名であり最も多かった[74]。「名森小学校の先生として御奉職」[75]、「養老郡笠郷小学校に、御奉職」[76]、「小野小学校の先生」[77]、「かねての御希望の如く、神戸小学校の先生」[78]、「安八郡福東国民学校へ御奉職」[79]、「岐阜市徹明国民学校に御奉職」[80] など、県内の小学校（国民学校）に配属されている。「御卒業直後は母校の高田小学校に御奉職」になったが、その後、「昨年十一月より女子師範の尋常科正教員講習に入られて御勉学」[81] と再教育を受けステップアップをはかる者もあった。県外で小学校教員となった者は、「名古屋の小学校に御出勤」[82]、「名古屋の国民学校に御奉職」[83]、「名古屋で少国民の師の君として教鞭」[84] など、主に名古屋市で教員を勤めた。その他、「始めは小学校に御奉職」し、後に「幼稚園にお務め」[85] になった1例があった。

【図表11】師範学校入学者の学歴

調査年	府県名	本科一部					本科二部（女子）				市町村立尋常小学校本科正教員数（女）
		高二卒	尋卒	高一修・中一修	中二修・高女二修	其他	五ケ年の高女卒	四ケ年の高女卒	実科高女卒	指定学校卒	
1925年6月	岐阜	37	0	0	0	1	0	89	0	0	750
1926年4月	岐阜	45	0	1	0	0	0	80	0	0	811
1929年4月	岐阜	36	0	3	4	1	1	86	0	0	1,013
1930年4月	岐阜	35	0	0	5	0	1	39	0	0	1,058
1931年4月	岐阜	30	0	1	7	2	0	39	0	0	1,016
1932年4月	岐阜	30	0	0	10	0	1	34	0	0	1,038
1933年4月	岐阜	31	0	0	8	0	0	21	0	0	1,438
1934年4月	岐阜	38	0	0	2	0	0	30	0	0	1,063
1936年4月	岐阜	32	0	0	10	0	0	31	0	0	1,076
1939年4月	岐阜	32	0	0	9	4	2	36	0	0	1,223
1940年4月	岐阜	32	0	0	13	0	0	45	0	0	1,209

〔各年度の「本年度入学者学歴ニ関スル調べ」（文部省普通学務局編『師範学校ニ関スル調査』、大正15～昭和16年）、各年度の『文部省年報』より作成〕。

小学校（国民学校）教員となった者は、就職者262名のうちの10%余り、全体（2,432名）の1%余りと僅かである。ただ、上記の通り、師範学校第二部や補習科を経て小学校教員となった例があった。参考までに、女子師範学校第二部の定員、そこから予想される高等女学校1校あたりの女子師範学校進学者について考える。【図表11】は文部省普通学務局編『師範学校ニ関スル調査』中の「本年度入学者学歴ニ関スル調べ」[86] からみた、岐阜県女子師範学校に入学した者の学歴である。本科第一部の入学者の学歴は、高等女学校2年を修了した者が若干数あるが、高等小学校2年を卒業した者が中心である。一方、本科第二部（女子）入学者の学歴はほぼ四年制の高等女学校卒業者で占められている。岐阜県においては、1934年に五年制となった加納高等女学校を除き、五年制の高等女学校は設置されなかった[87]。なお、1930年以降、岐阜県女子師範学校第二部の生徒数が半減したのは、定員が90名から40名へと削減されたためである。教員養成にかかる経費の削減、本科正教員の充実をねらったものであり、他府県においても定員の減少がみられた[88]。岐阜県内の高等女学校は1930年時点で14校設置されていたが、90人の定員でも1校あたりおよそ6名となる。定員が40名となると、その半数以下、およそ3名弱ということになる。このような背景から、この時期の師範学校第二部進学者の少なさを説明できよう[89]。

幼稚園教員となった者は8例を確認できた。一例を示すと、「諸先生や皆々様方と御別れいたしましてからなつかしい故郷を離れて名古屋へまゐりました。そうして四月以来ずつと幼稚園につとめてゐます」[90]、「別院内幼稚園へ日々お通ひ」[91]、「大垣市立幼稚園の保姆」[92]、「幼稚園の可愛いお子のお母様お姉様」[93]、「大垣の幼稚園の先生としてお務め」[94] などである。小学校同様、県内、名古屋市の幼稚園に勤めている。

その他、「なつかしい母校へ御出勤」[95]、「十二月末より母校の事務へお勤めでございますので補習科の私達は大へん力強く感じて居ります」[96] など、大垣高等女学校で事務等を勤めたケースがみられた。

②その他公務等

その他の公務等に従事したケースでは、東海道本線沿線であることを反映しているのか、最も多かったのは「名古屋鉄道局に御出勤」[97]、「大垣駅にお（ママ、「詰め」カー筆者註）つめ」[98] など、鉄道局等に勤めたケースであり、30例余りに上った。ついで、税務署や市役所、郵便局など、公的機関に勤めた例が10例余りであった。「昭和二年卒」の卒業生が「大垣税務所内に於て最初の女事務員として活動」[99] したことは注目できる。その他、「目下大垣図書館に御勤務中」[100]、「市役所にお務め」[101]、「岐阜県学務部社会教育課に御通勤」[102]、「上多度村役場」[103]、「池野の郵便局」[104]、「大垣郵便局で、電話の交換」[105] など、県内の事務に従事した。

希少な例としては、「東京の陸軍省の方へおつとめ」[106]、「大蔵省にタイピストとして潑剌とお暮らしです。東京にてしかも大蔵省とは、本当におたのしみな御生活でございます」[107]、「司令部にタイピストとして御活躍」[108]、など国家事務に従事した卒業生である。

医療機関に就職した者は、「卒業以来、唯先生のお教を守り、裁縫の傍ら家事にいそしんで居」たが、「一時は社会の人の中に出て、心の修養をするのも好からうと言はれ、十一月中旬より、市立診療所へ勤める事になりました」[109] との消息を寄せている。このような「腰掛け型」[110] は、ここに述べた公務等に限られるものではなかろう。

③会社等

就職者のうち最も多かったのは、会社等に勤めた者であり、通算して149名、262名のうちおよそ56.9％を占めた。先に示した【図表10】をみると、会社等に就職する者が増加していったことを指摘できる。

会社等に分類した者をみてみると、工場に勤めた者が最多であり、とりわけ繊維工場における事務の従事などが47例みられた[111]。記述内容の例をみると、「紡績会社の寄宿舎に多くの女工さんの監督としておつとめ」[112]、「名古屋の日本毛織に女事務員としておつとめ」[113]、「関ケ原の日本紡績に御勤務中」[114]、「垂井の大日本紡にお務め」[115]、「帝国繊維株式会社におありです」[116] などである。繊維工場が多い地域性を反映している。「始め日毛大垣工場に務めて居られましたが、現今は関ケ原銀行」[117]、あるいは「始め日毛大垣工場に務めて居られましたが、昨年末より名鉄に転任」[118] など、転職した例もみられた。

繊維以外の工場に勤めたケースが23例ほど確認できた。金属工業が多く、「市内の特殊軽合金株式会社に御通勤」[119]、「大垣の軽合金会社とか時局柄大切な事務にたづさはり、日々お元気におつとめ」[120]、「大垣鉄工へお勤め」[121]、「名古屋の大同製鋼へお勤め」[122]、「太平洋工業におつとめ」[123] などの記述がみられた。

近隣の電気・電力会社へ勤めたケースが26例確認できた。「五月頃より東邦電力の事務員として毎日元気で勤めてゐます」[124]、「揖斐電会社にお務め」[125]、「中部配電株式会社にお勤め」[126]、「揖斐川電工に御通勤でございます」[127] などの記述がみられた。

以上のように、就職者の勤め先をみると工業従事者が多くおよそ半数を占めていた。彼女らは繊維工業や金属工業、電気・電力の分野で事務などを務めた。

工業に比べ、商業分野での活躍は少数であった。商業分野では、銀行などの金融機関への就職が最も多く、28例であった。「岐阜市の貯蓄銀行にお務め」[128]、「名古屋の愛知銀行に御務め」[129]、「大垣貯蓄銀行に御通勤」[130]、「共立銀行で御勤務中」[131]、「十六銀行赤坂支店におつとめ」[132]、「東海銀行におつとめ」[133] など、大垣、岐阜市内、あるいは愛知県などを勤務地として就職した。

デパートは、大正期以降の高等女学校卒業者の就職先としてしばしば言及されるが、本稿で対象とし

た事例の中では僅少であった。「岐阜丸物におつとめ」[134]、あるいは「職業婦人として雄々しく生活戦上に立つて（中略）名古屋の松坂屋の食堂にてサービス」[135]（3名）などの記述から、近隣の百貨店へ就職したことが分かる。

その他、電信・交通業に従事した例として、「揖斐電鉄におつとめ」[136] などの記述がみられた。あるいは内地を離れた例としては、「奉天市敷島区協和街十七段電々女子白鳩寮同社のタイピスト」[137]、「蒙彊張家口市中央大街中央航空会社」[138] などを確認できた。

就職者のこのような進路動向の背景には、良質で豊富な地下水を蓄えたこの地で、繊維工場を中心に近代工業が発展していたことが挙げられよう[139]。また、岐阜の十六銀行や大垣の共立銀行など「近くの銀行へタイピストとして御通勤」[140] できることも当地の特色として指摘できよう。「丸物百貨店」「松坂屋」などの百貨店への就職はわずかであった。

（3）裁縫等稽古・家事

先の【図表7】に示した通り、裁縫等稽古や家事に従事したケースは通算で1,087例・44.7％と最多を占めていたが、本稿で対象とした卒業生をみる限り、裁縫等稽古事・家事に従事した者の比率には大きな変動がみられた。最も高かった1930年で63.4％であったが、その後低下してゆき、1942年には25.2％となった。

学びの場は実に多様であったが、内容はそのほとんどが裁縫であり、わずかに「ピアノの御練習」[141] や「毎日御殿町へミシンをお習ひ」[142] になった例もあった。裁縫の熟達をねらった一例を示すと、「久瀬川のお裁縫へ皆様御一緒で時々お遊びに」[143]、「岐阜町の増田裁縫所に御通ひです同窓の人が沢山で楽しいでせう」[144]、「皆様御一緒に八幡様の近くの武光様へ日々御熱心にお裁縫にお通ひ」[145] などである。このような「裁縫所」には、同窓が連れ立って通っていた様子をうかがうことができる。「毎日関様のお裁縫に通つて（中略）クラスメートの方と御一緒ですから、懐しい母校の思ひ出話に時折花を咲かせますの」[146]、「池野、野原裁縫塾へお通ひでございます。お友達も沢山御一緒ですし……。お話がはずんでお目玉頂戴なさいません様」[147] などと記されているように、卒業後、裁縫等を身につけるとともに、同窓生との旧交を温める社交の場でもあったことが分かる。

一点、注目しておきたい点は、「野原裁縫塾へ稽古事にお通ひの傍、良師の御感化により仏教を信仰なさり限り無き喜びを感じつつお暮らし」[148] などの記述である。この他、「田町の善教寺でお裁縫をお稽古」[149]、「御宅から同地の寺院へお裁縫にお通ひ」[150]、「徳秀寺へお花やお茶にお通ひ」[151] などと記されている。「良師の御感化」を受け、「仏教を信仰」した例は少ないかも知れないが、「岐阜市の某寺へ、行儀見習」[152] など、結婚に備え裁縫以外の素養をも身につけたと考えられる。「お裁縫のおけいこ」をするうちに、「昨年の暮本町の三星呉服店の御長男と（中略）めでたく高砂の式を」[153] 挙げた例もあり、「結婚生活の準備機能」[154] をさらに補うという機能を果たしていた、と捉えることができよう。

おわりに

本稿の分析を通して、以下の点を明らかにした。

『諸調査』などの統計から、高等女学校卒業後の進路について検討した。岐阜県の高等女学校卒業生をみると、「更ニ学校ニ入リタルモノ」の比率がおよそ2～3割、「其他ノ者」の比率が7～8割であり、全国的な動向とそれほど大きく変わらない。ただ、学校別にみると、前者は岐阜・大垣の両高等女学校で岐阜県のおよそ半数を占めていた。

『同窓会誌』中の「同級消息」欄から、岐阜県大垣高等女学校卒業生の具体的な進路について検討した。通算しておよそ半数の者が、卒業後、裁縫等の稽古事、あるいはその傍らで家事に従事したことが分かっ

た。裁縫等の稽古事に勤しんだケースの記述から、実質的な技芸の伝達の他、寺院における「行儀見習」という、前近代的な教育機能を残していたことも考えられる。しかし、その比率は1930年代後半から急減した。

その一方で、就職者の比率が上昇した。裁縫等稽古・家事の比率の低下とともに就職者の比率は上昇し、1942年にはおよそ4分の1にのぼった。勤務先をみると、会社等、とりわけ工場に勤めたケースが最多を占め、この地の特色を表すものと言えよう。また、岐阜の十六銀行や大垣の共立銀行など県内を中心とした銀行等でタイピストなどの事務に従事した。百貨店への就職は一部みられたが、全体からみると僅かであった。卒業直後に教員となった例は1割程度であった。ただし、師範学校・その他教員養成諸学校への進学者を含めて考える必要がある。

通算しておよそ3割の者が、卒業後、補習科、あるいは専門学校や各種学校などで、何らかの学修を続けた。最も高い1942年でおよそ42.9%に達した。進学・その他の学修をした者のうち、およそ半数を占めたのは補習科等へ進んだ者であった。補習科在学中に検定を受けて教員となった者、会社に就職した者があり、これも結婚や就職までの「腰掛け」として一部機能していたとみられる。進学・その他の学修をした者の約15%は専門学校へ進学した。そのうちの半数以上は東京府に出た。ついで、通学できる愛知県の専門学校への進学が2割ほどであった。その他京都府、大阪府、兵庫県など関西地方の学校へ進んだ。専門学校進学者数にせまったのは師範学校やその他教員養成諸学校進学者数であった。しかし、本稿で対象とした時期、師範学校第二部への進学が難しくなり、その数は減少した。各種学校へ進んだ者をみると、これも東京府の他、岐阜市や名古屋市など、電車で通える範囲の、主に裁縫を学ぶ学校への入学が中心であった。また、若干数ではあるが、当時としては最先端であった英語の学修をした者もみられた。

本稿では「同級消息」欄に掲載された、短文の記述を中心に卒業後の進路について検討した。引き続き、『同窓会誌』中、「思潮」欄、「地方通信」欄などから分かる進路選択の背景について、また、先行研究で指摘されている結婚の際の「地位表示機能」[155] などについても考察する。

註

1）文部省普通学務局編『全国高等女学校/実科高等女学校ニ関スル諸調査』、大正5年～昭和15年。

2）吉田文「高女教育の社会的機能」広田照幸監修、木村涼子編『リーディングス日本の教育と社会　第16巻　ジェンダーと教育』日本図書センター、2009年、291頁。なお、以下、出版年については、その文献の表記の通りとする。

3）岐阜県教育委員会編『岐阜県教育史　通史編　近代三』岐阜県教育委員会、平成15年、339頁。以下、同書を引用・参照する際は、「『岐阜県教育史　通史編　近代三』、339頁。」のように略記する。

4）『岐阜県教育史　通史編　近代三』、322-323頁参照。

5）国立教育研究所編『日本近代教育百年史　第五巻　学校教育3』教育研究振興会、1974年、226頁。以下、同書を引用・参照する際は、「『日本近代教育百年史　第五巻』、226頁。」のように略記する。

6）水野真知子『野間教育研究所紀要　第48集　高等女学校の研究（下）―女子教育改革史の視座から―』野間教育研究所、2009年、26-31頁参照。同書によると、「女子の職業と教育」については、1910年代後半から高等女学校においても「賃金収入に結び付く活動の素地を与える必要があると考えられる」ようになり、また、昭和期に入ると「女子労働力への依存度が高ま」ったと指摘されている。

7）岐阜県教育委員会編『岐阜県教育史　通史編　近代四』岐阜県教育委員会、平成16年、214頁。以下、同書を引用・参照する際は、「『岐阜県教育史　通史編　近代四』、214頁。」のように略記する。

8）岐阜県立大垣北高等学校創立八十周年記念事業実行委員会編集委員会編『大垣北高八十年史』岐阜県立大垣北高等学校創立八十周年記念事業実行委員会、昭和51年、274頁。
9）井本佳宏「戦前期における女子中等教育システムの形成とその構造―システム理論からのアプローチ―」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第55集第1号、2006年、105-117頁参照。
10）岐阜県大垣高等女学校同窓会編『同窓会誌』第23、24、26～29、31～33、34、36号、昭和2～18年。
11）『岐阜県教育史　通史編　近代四』、212頁参照。
12）『日本近代教育百年史　第四巻』、1120頁。
13）『日本近代教育百年史　第五巻』、222頁。
14）『日本近代教育百年史　第五巻』、226頁。
15）文部省普通学務局編『昭和十三年度　全国高等女学校/実科高等女学校ニ関スル諸調査　昭和十三年十月一日現在』、昭和15年、80-81頁参照。以下、「『諸調査　昭和十三年十月一日現在』、80-81頁参照。」のように略記する。
16）年度は異なるが、参考までに宮城県女子専門学校の「生徒出身学校別」（同校編『昭和七年度　宮城県女子専門学校一覧』、昭和7年、50-53頁）によると、県内の高等女学校および実科高等女学校出身者が213名となっている。
17）『諸調査　昭和十三年十月一日現在』、50-51頁参照。
18）『諸調査　昭和十三年十月一日現在』、91頁参照。
19）『諸調査　昭和十三年十月一日現在』、61頁参照。
20）『諸調査　昭和十三年十月一日現在』、91-92頁参照。
21）『諸調査　昭和十三年十月一日現在』、61-62頁参照。
22）岐阜県総務部統計課編『第四十六回（昭和十一年）　岐阜県統計書　第一巻（土地・戸口・土功・財政等之部）』（岐阜県、昭和13年）中、「人口及戸数」（12-17頁）によると、女性の「現住人」は岐阜市が69,600人、大垣市が31,849人であった（下表参照、構成比は筆者が付記した）。

郡市名	現住人（男）	現住人（女）	計	構成比	郡市名	現住人（男）	現住人（女）	計	構成比
岐阜市	63,322	69,600	132,922	10.3%	山県郡	15,421	14,435	29,856	2.3%
大垣市	26,784	31,849	58,633	4.5%	武儀郡	51,912	50,138	102,050	7.9%
高山市	16,000	15,811	31,811	2.5%	郡上郡	31,486	29,284	60,770	4.7%
稲葉郡	45,520	46,441	91,961	7.1%	加茂郡	43,363	42,341	85,704	6.6%
羽島郡	29,208	30,962	60,170	4.7%	可児郡	19,526	18,548	38,074	3.0%
海津郡	13,598	13,965	27,563	2.1%	土岐郡	53,284	51,774	105,058	8.1%
養老郡	16,618	16,822	33,440	2.6%	恵那郡	61,087	60,389	121,476	9.4%
不破郡	18,024	20,751	38,775	3.0%	益田郡	20,943	19,871	40,814	3.2%
安八郡	20,657	21,277	41,934	3.3%	大野郡	15,655	14,676	30,331	2.4%
揖斐郡	28,302	27,721	56,023	4.3%	吉城郡	25,980	25,144	51,124	4.0%
本巣郡	25,825	25,178	51,003	4.0%	計	642,515	646,977	1,289,492	100.0%

23）岐阜県大垣高等女学校同窓会編『同窓会誌』第23号、昭和2年3月、147頁。以下、同誌から引用する際は、「『同窓会誌』第23号、昭和2年3月、147頁。」のように略記する。
24）『同窓会誌』第33号、昭和13年3月、236頁。
25）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、170頁。
26）『同窓会誌』第28号、昭和7年3月、209頁。
27）『同窓会誌』第29号、昭和8年3月、253頁。
28）『同窓会誌』第23号、昭和2年3月、149頁。
29）「その他・不明」に分類した記述内容の一例を示す。具体的な進路が記載されていない「東都で御勉学」（『同窓会誌』第26号、昭和5年5月、159頁）、「名古屋の某学校に御勉学中」（『同窓会誌』

第27号、昭和6年3月、179頁)、「御郷里の熊本で某学校へ行つてゐられます」(『同窓会誌』第27号、昭和6年3月、181頁)、「京都の学校に御在学中」(『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、191頁）などは不明とした。具体的な名称が書かれているが、属性を判断できなかった「中京女子専門学校に御在学」(『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、190頁)、「岐阜のレデイスの洋裁にお通ひ」(『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、197頁）なども不明とした。

30）前掲、吉田文「高女教育の社会的機能」、285頁参照。

31）『同窓会誌』第23号、昭和2年3月、146頁。「女流歌人の大家」である「伯母様」は、与謝野晶子であろう。逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成　第二巻　大正7年～昭和5年』(八木書店、2001年、322頁）によると、この卒業生「志知仁保栄」の就職斡旋のために、昭和5年2月18日、与謝野寛が白仁秋津に宛てて以下のような書簡を送ったようである（ルビは同書簡集成のまま)。

（前略）今年三月ニ国語教員の免状を受くべき妻の姪志知（シチ）にほえと申す者の履歴書二通をこゝに同封仕候。御県下の女学校の何れかへ国語教員として御世話下さるまじくや。折入つて願上候。本人ハ温雅にて聡明を兼ね、その人格ハ保証仕り候。就職難の時代につき、成るべく早く職ニ就かせ申度候。(後略）

また、その翌日付で、与謝野晶子は次のような「保証書」を記している。

志知仁保栄（シチニホエ）は私の姪（妹の娘）にて、父は哲学研究の文学士（東京帝国大学文学部卒業)、母は京都府立第一高等女学校の専攻部を卒業致し候。

本人ハ篤実聡明なる質にて軽佻の風なく、極めて、勤勉且つ親切に候。平生健康にて、未だ大患に罹りしこと無之候。

国語科教員として御採用下され候はば、本人の身元一切ハ私ニ於て引受け申すべく候。

なお、同書簡集成の「所蔵者・出典一覧」によると、この書簡は「白仁欣一蔵」とされている。

32）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、184頁。

33）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、182頁。

34）『同窓会誌』第32号、昭和11年3月、314頁。

35）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、194頁。

36）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、181頁。

37）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、190頁。

38）『同窓会誌』第28号、昭和7年3月、205頁。

39）『同窓会誌』第27号、昭和6年3月、180頁。

40）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、182頁。

41）『岐阜県教育史　通史編　近代四』、444頁。

42）『同窓会誌』第23号、昭和2年3月、146頁。

43）『同窓会誌』第23号、昭和2年3月、147頁。

44）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、187-188頁。

45）『岐阜県教育史　通史編　近代四』、452-454頁参照。

46）岐阜県立大垣北高等学校創立百周年記念事業実行委員会編集委員会編『大垣北高百年史』岐阜県立大垣北高等学校創立百周年記念事業実行委員会、平成7年、235頁参照。

47）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、184頁。

48）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、185-186頁。

49）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、187-188頁。

50）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、193頁。

51）1924（大正13）年3月31日に改正された「岐阜県立高等女学校学則」第1条には「補習科ヲ置ク

ハ岐阜高等女学校及大垣高等女学校ニ限ル」（岐阜県教育委員会編『岐阜県教育史　史料編　近代三』岐阜県教育委員会、平成 11 年、32 頁）とある。この後、1930 年より県立中津高等女学校に、1941 年には私立の富田高等女学校にも設置された（岐阜県教育委員会編『岐阜県教育史　史料編　近代五』岐阜県教育委員会、平成 11 年、536 頁参照）。

52）『岐阜県教育史　通史編　近代三』、338 頁。

53）前掲、吉田文「高女教育の社会的機能」、285 頁。

54）『同窓会誌』第 29 号、昭和 8 年 3 月、244 頁。

55）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、191 頁。

56）『同窓会誌』第 24 号、昭和 3 年 3 月、152 頁。

57）『同窓会誌』第 29 号、昭和 8 年 3 月、243 頁。

58）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、187 頁。

59）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、186 頁。

60）『同窓会誌』第 33 号、昭和 13 年 3 月、248 頁。

61）『同窓会誌』第 26 号、昭和 5 年 5 月、166 頁。

62）東京家政学院については、芳進堂編輯部編『最新東京女子学校案内』武田芳進堂、昭和 10 年、166 頁を参照した。同校は、1939 年に文部省告示第 91 号をもって高等女学校となっており（『官報』第 3651 号、昭和 14 年 3 月 9 日、323 頁参照）、【図表８】では「高等女学校・実業学校」に分類してある。

63）愛知産業大学ホームページ「学校法人愛知産業大学のあゆみ」（https://www.asu.ac.jp/univ/history/：令和 2 年 11 月 14 日閲覧）参照。1926 年に、愛知高等女子工芸学校が職業学校として設置認可された（『官報』第 4051 号、大正 15 年 2 月 27 日、685 頁参照）。

64）一例を挙げると、岐阜市の岐阜裁縫女学校（中部学院大学 10 年誌編集委員会編『中部学院大学 10 年誌』学校法人岐阜済美学院・中部学院大学、2010 年、34-35 頁参照）、愛知県の愛知簿記学校（愛知県教育委員会編『愛知県教育史　第四巻』愛知県教育委員会、昭和 50 年、746 頁参照）、「女子高等師範学校並に女子医学専門学校及び其の他専門学校の入学試験を受けんとする者の為」の昭英学園（前掲、『最新東京女子学校案内』、150-151 頁参照）などがみられた。

65）『同窓会誌』第 27 号、昭和 6 年 3 月、182 頁。大阪府にあった「古屋英学塾」については、藤本周一「戦前昭和期に大阪府下の学校等（旧学制）に勤務した外国人教師について（その３・完）」（『大阪経大論集』第 59 巻第 1 号、2008 年、101-115 頁）を参照した。

66）『同窓会誌』第 28 号、昭和 7 年 3 月、205 頁。

67）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、184 頁。「パルモア英学院」は「パルモアー英学校」か（兵庫県内務部統計課編『昭和七年三月刊行　兵庫県管内　学校、幼稚園、教員養成所　青年訓練所、図書館、青年団、婦人会一覧』、昭和 7 年、99 頁参照）。ただし、この卒業者については、【図表７】にはカウントしていない。

68）『同窓会誌』第 23 号、昭和 2 年 3 月、148 頁。

69）『同窓会誌』第 28 号、昭和 7 年 3 月、207 頁。

70）『同窓会誌』第 26 号、昭和 5 年 5 月、165 頁。

71）『同窓会誌』第 23 号、昭和 2 年 3 月、149 頁。

72）松坂屋名古屋店編『大松坂屋の全貌　上巻』百貨店日日新聞社、昭和 12 年、167 頁。同書によると、「常磐裁縫塾」は「第十二章　店員教育とその施設」（同書、151-167 頁）に以下のように紹介されている。

松坂屋の経営にて名古屋市東区関鍛冶町一丁目にある。元松坂屋附属和服裁縫所と称して居たのを、昭和四年四月、現在の組織に昇格せしめたので、主として女子の実生活に必須なる和服

裁縫、婦人子供服及び割烹に関する知識技能を授け兼ねて高尚優美なる趣味を涵養し、温良貞淑なる婦人を養成するを目的として居る（後略）（165頁）

73）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、190頁。「滋賀県赤十字看護婦養成所」は、日本赤十字社滋賀支部看護婦養成所か（日本赤十字社滋賀支部編『日本赤十字社滋賀支部誌』日本赤十字社滋賀支部、昭和8年、4頁参照）。

74）「八月に見事に検定にパスなさいましたとか」（『同窓会誌』第24号、昭和3年3月、154頁）なども小学校教員となった事例と考えられるが、明記されていないのでここには含めていない。

75）『同窓会誌』第33号、昭和13年3月、245頁。

76）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、188頁。

77）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、191頁。

78）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、192頁。

79）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、184頁。

80）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、184頁。

81）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、190頁。

82）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、187頁。

83）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、185頁。

84）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、187頁。

85）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、190-191頁。

86）文部省普通学務局編『師範学校ニ関スル調査』、大正15～昭和16年。

87）『岐阜県教育史　通史編　近代四』、204-205頁参照。

88）『岐阜県教育史　通史編　近代四』、440-445頁参照。

89）以上のことを考えると、学校教員はハードルの高い職業であったと考えられる。ただ、以下のような記述をみると、「大学を出て」デパートに勤める者と教員である自らを照らし合わせて複雑な心境を抱く様子をうかがうことができる。

職業を持つた。京都の鐘紡の中にある女学校の先生。制度は異るが内容は普通の女学校と同じである。家事、英語、音楽を受持ち、その他教壇以外の事務のお手伝やら、秘書の役目もした。給料は安い。しかし同僚同志は割合に気が合つて愉快だつたが、事務所内の空気の何となしに、破れかぶれの希望のない気分のあることは争へない。

一日　デパートに行つた。大学を出て店に出てゐる人に逢つた。

「如何ですか」と尋ねると、

「店員なんか筋肉労働者と同じです。むしろ貴女方のお仕事の方が羨ましい」とおつしやる。誰でも他人の方がよく見えるのだ。朝九時から夜六時まで、きちんと定つた勤務時間を羨しく思つてゐた私だ。しかし世の中のすべての人が、甲は乙を羨み、乙は甲を羨んでゐるのではないだらうか。自らの境遇に満足して、そこを基にしてより高き処へ一歩々々、築き上げて行く人になりたい。（後略）（『同窓会誌』第32号、昭和11年3月、17頁）

90）『同窓会誌』第28号、昭和7年3月、204頁。

91）『同窓会誌』第31号、昭和10年3月、258頁。

92）『同窓会誌』第34号、昭和16年3月、195頁。

93）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、185頁。

94）『同窓会誌』第36号、昭和18年3月、185頁。

95）『同窓会誌』第29号、昭和8年3月、245頁。

96）『同窓会誌』第33号、昭和13年3月、245頁。

97）『同窓会誌』第 32 号、昭和 11 年 3 月、322 頁。
98）『同窓会誌』第 29 号、昭和 8 年 3 月、248 頁。
99）『同窓会誌』第 23 号、昭和 2 年 3 月、147 頁。
100）『同窓会誌』第 26 号、昭和 5 年 5 月、164 頁。
101）『同窓会誌』第 33 号、昭和 13 年 3 月、247 頁。
102）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、181 頁。
103）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、194 頁。
104）『同窓会誌』第 33 号、昭和 13 年 3 月、250 頁。
105）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、190 頁。
106）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、188 頁。
107）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、194 頁。
108）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、183 頁。
109）『同窓会誌』第 32 号、昭和 11 年 3 月、313 頁。
110）『日本近代教育百年史　第五巻』、227 頁。
111）戦前、大垣市で操業していた工場は、「大日本紡績・鐘淵紡績・大垣毛織・中央毛糸紡績・若林製糸紡績・岸和田紡績・太陽レーヨン・岸和田人絹・東亜紡織・揖斐川電気・日本合成化学・大垣瓦斯・日本耐酸壜・太平洋工業など繊維と化学が主であった」と言われる（平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系　第二一巻　岐阜県の地名』平凡社、1989 年、217 頁参照）。
112）『同窓会誌』第 24 号、昭和 3 年 3 月、154 頁。
113）『同窓会誌』第 26 号、昭和 5 年 5 月、167 頁。
114）『同窓会誌』第 26 号、昭和 5 年 5 月、164 頁。
115）『同窓会誌』第 33 号、昭和 13 年 3 月、247 頁。
116）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、194 頁。
117）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、190 頁。
118）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、190 頁。
119）『同窓会誌』第 33 号、昭和 13 年 3 月、253 頁。
120）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、195 頁。
121）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、181 頁。
122）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、189 頁。
123）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、194 頁。
124）『同窓会誌』第 29 号、昭和 8 年 3 月、243 頁。
125）『同窓会誌』第 33 号、昭和 13 年 3 月、250 頁。
126）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、185 頁。
127）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、193 頁。
128）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、196 頁。
129）『同窓会誌』第 34 号、昭和 16 年 3 月、189 頁。
130）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、190 頁。
131）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、191 頁。
132）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、194 頁。
133）『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、194 頁。
134）『同窓会誌』第 27 号、昭和 6 年 3 月、183 頁。「岐阜丸物」については、『岐阜県商工要覧』（万朝報名古屋支局、昭和 14 年）に、「日本デパート界に堂々君臨」（同書、43 頁）と紹介されている。

135)『同窓会誌』第 28 号、昭和 7 年 3 月、204 頁。
136)『同窓会誌』第 28 号、昭和 7 年 3 月、205 頁。
137)『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、183 頁。
138)『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、186 頁。
139) 前掲、『日本歴史地名大系第　二一巻　岐阜県の地名』、215 頁参照。
140)『同窓会誌』第 26 号、昭和 5 年 5 月、160 頁。
141)『同窓会誌』第 28 号、昭和 7 年 3 月、205 頁。
142)『同窓会誌』第 27 号、昭和 6 年 3 月、184 頁。
143)『同窓会誌』第 24 号、昭和 3 年 3 月、152 頁。
144)『同窓会誌』第 24 号、昭和 3 年 3 月、152 頁。
145)『同窓会誌』第 27 号、昭和 6 年 3 月、181 頁。
146)『同窓会誌』第 32 号、昭和 11 年 3 月、310 頁。
147)『同窓会誌』第 33 号、昭和 13 年 3 月、236 頁。
148)『同窓会誌』第 36 号、昭和 18 年 3 月、181 頁。
149)『同窓会誌』第 24 号、昭和 3 年 3 月、154 頁。
150)『同窓会誌』第 31 号、昭和 10 年 3 月、236 頁。
151)『同窓会誌』第 31 号、昭和 10 年 3 月、240 頁。
152)『同窓会誌』第 31 号、昭和 10 年 3 月、240 頁。
153)『同窓会誌』第 28 号、昭和 7 年 3 月、206 頁。
154)『岐阜県教育史　通史編　近代三』、339 頁。
155) 天野郁夫「教育の地位表示機能について」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第 38 集、東洋館出版社、1983 年、44-49 頁参照。

【謝辞】本研究を進めるにあたり、川口雅昭先生（人間環境大学名誉教授、皇學館大学教職アドバイザー）に御指導賜った。ここに謝意を表する。なお、本稿は、中国四国教育学会第 72 回大会「教育史Ⅱ」部会（令和 2 年 11 月 22 日、広島大学オンライン大会）にて報告した「岐阜県における高等女学校卒業生の進路動向」を基に執筆したものである。